

# 事業実施結果概要

事業名：2025 年度「あいちデジタルヘルスプロジェクト」社会実装先行事業委託業務  
分野：地域居住・生活支援  
テーマ：⑦対話型ツールを用いた健康・生活機能の持続的なモニタリング

## 1. 事業の全体像及び背景

### (1) 事業全体の概念図 (図 1)

- 対話型 AI による日記機能 (フレイル予防および見守りサービス「安心日記®」の一機能) を用いて、高齢者の健康・生活情報を持続的にモニタリングし、健康リスクを早期に発見する仕組みを構築する。
- 健康リスクを早期に検出した後には、個人に合った様々なソリューションに繋げ、高齢者の生活を支援する。
- 家族に高齢者の日々の生活の記録を共有し、見守りに関する不安・負担を軽減する。



見守りサービス「安心日記」

- 対話型AIとの自然な対話から健康や生活に関する情報を取得
- 取得した情報を蓄積・統合・分析し、健康リスクを早期発見
- リスクを早期発見後、個人の状態に合わせて必要なサービスを提案
- 利用者の同意の上、家族や自治体職員などの支援者に情報を共有

	Day 1	Day 2	Day 3	...	Day 20	Day 21	Day 22
Q1	1	1	1		1	0	1
Q2	0	0	0		0	0	0
Q3	1	0	0		0	0	0
...							
Q23	0	0	0		0	0	0
Q24	1	1	1		1	1	1
Q25	0	0	0		0	0	0
フレイルスコア	18	17	17		17	16	16

健康・生活機能に関する情報取得  
例)フレイル関連因子のモニタリング

図 1 事業全体の概念図

### (2) 解決すべき課題とその状況

課題：高齢者単独世帯増加に伴う、家族の見守りに関する不安・負担

状況：高齢者単独世帯は高齢者を含む世帯の 32.7% を占める。遠居の場合、42.3% が見守り対象の健康状態を把握できていない (同居の場合 3.8%、近居の場合 3.7%)。

### (3) 課題を解決することにより期待される効果及び実現する地域像 (社会的意義)

期待される効果：地域在住高齢者のフレイルや認知症への進行予防、家族の見守りに関する不安・負担軽減

実現する地域像：対話型 AI による日記機能を用いて健康・生活機能を持続的にモニタリングし、高齢者の生活を支援するとともに、高齢者の見守りに関する家族の不安・負担を軽減する。

## 2. 本事業の推進体制

代表：学校法人藤田学園 藤田医科大学

協力団体：株式会社 emotivE、豊田通商株式会社、豊田市

### 3. 本事業で提供するサービスの全体像

本事業では、対話型 AI による日記機能(「安心日記®」の一機能、開発:株式会社 emotivE、豊田通商株式会社)を用いて、高齢者の健康・生活機能の持続的にモニタリングし、高齢者の生活を支援するとともに、高齢者の見守りに関する家族の不安・負担を軽減することを目指す。主なサービス内容は以下の4つである。

- 1) 対話型 AI との自然な対話から健康や生活に関する情報を取得
- 2) 取得した情報を蓄積・統合・分析し、健康リスクを早期発見
- 3) 個人の状態に合わせて必要なサービス(自己管理、地域活動など)の提案
- 4) 利用者本人の同意を得た上で、1、2)で取得した情報を家族等の支援者へ共有  
利用者の健康リスクの兆候が確認された際には、支援者にアラートを通知

### 4. 2025 年度の実証内容及び結果

地域在住高齢者を対象とした「サービスの受容性評価、使用性評価、有効性評価」、見守る側の家族を対象とした「サービスの受容性評価」を実施した。

#### 実証1 「地域在住高齢者を対象とした受容性評価」

概要	内容
時期	第2四半期
目的	サービスの一部機能に関する受け入れを明らかにする
対象	地域在住高齢者 49 名
方法	対面形式でのサービスの一部機能(自由対話、フレイルチェック機能、健康行動提案機能)の体験、ヒアリング調査およびアンケート調査
評価	リッカート尺度を用いてサービスの受容性を評価
結果	・設問「お話し相手になってくれそうか」に対する肯定的な回答の割合(5点中4点以上):51.6% ・設問「役に立つ情報を教えてくれそうか」に対する肯定的な回答の割合:51.6%

#### 実証2 「地域在住高齢者を対象とした使用性・有効性評価(長期間使用の実証)」

概要	内容
時期	第2四半期～第3四半期
目的	・サービスの使いやすさを明らかにする ・サービスの継続使用によって行動変容が生ずるかを明らかにする
対象	地域在住高齢者 17 名(うち、解析対象 16 名)
方法	・本人のスマートフォンあるいは貸与のタブレットを用いて、サービスを2ヶ月間使用、サービス利用に関する指標(継続利用率、使用回数等)を取得 ・実証開始時および終了時に行動変容ステージやフレイル等の評価を実施
評価	サービス利用に関する指標、行動変容ステージ、基本チェックリスト、意欲・生活に関するアンケート、使用性に関するアンケート(System Usability Scale)
結果	・サービス利用に関する指標(継続利用率):79%(類似先行研究 69%)(図2) ・行動変容ステージ:実証開始時に「無関心期～行動期」の6名中5名はステージが向上した(図3) ・フレイル(基本チェックリスト):16名中8名はスコアが改善した ・意欲・生活に関するアンケート:設問「生活の寂しさ」が有意に減少した( $p = 0.02$ ) ・使用性に関するアンケート:「使いやすさ」に関する設問で肯定的な回答が多かった

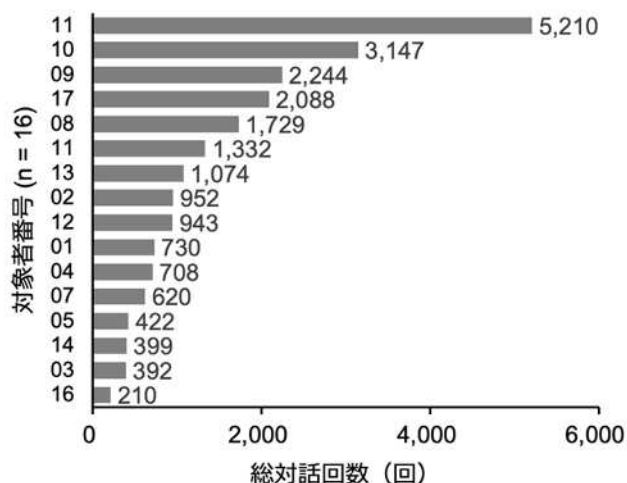
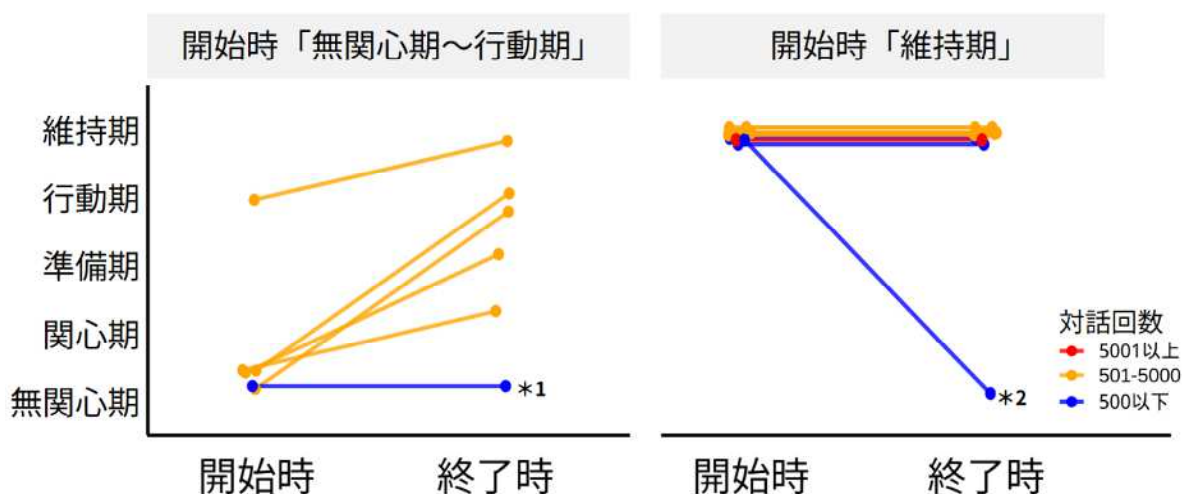


図2 (左)  
総対話回数

図3 (下)  
行動変容ステージの推移



### 実証3 「支援者（見守りを行う家族）を対象とした見守り機能の受容性評価」

概要	内容
時期	第4四半期
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>見守りに関する現状や課題を明らかにする</li> <li>サービスの見守り機能に関する受け入れを明らかにする</li> </ul>
対象	支援者（見守りを行う家族）167名（内訳：Web 144名、現地 23名）
方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア団体会員に Web アンケートを依頼</li> <li>豊田市役所来庁者にサービスの体験、アンケートを依頼</li> </ul>
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>選択式アンケートを用いて、見守りに関する現状や課題を調査</li> <li>リッカート尺度を用いて、サービスの受け入れを評価</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>設問「見守り対象の家族の健康状態把握の程度」に対する否定的な回答（あまり把握できていない、ほとんど把握できていない）の割合：同居 2.9%、近居（30分未満）3.3%、遠居（30分以上）41.4%</li> <li>設問「本サービスの見守り機能の利用によって、見守りに関する安心感が高まりそうか」に対する肯定的な回答（とても高まる、ある程度高まる）の割合：76.8%</li> </ul>

## 5. 2026年度に向けた課題

- (1) 実証規模（対象者の層、検証する機能）の拡大とエビデンスの蓄積
- (2) ビジネスモデルの更新
- (3) ポータルサイト・データ連携基盤との接続・連携